「日本語と中国語」の特集にあたって

編集部

我々の生活の中にはたくさんの「海外」があり、生活は海の向こうとつながって成立している。夕べの食卓に並んだたくさんの「海外」がいかにしてここに辿り着いたかを思い巡らせば、それがどれだけのコミュニケーション活動を介して実現したか想像に難くないだろう。グローバリゼーションによるコミュニケーション活動の増加は、観光、親睦、留学、商用、会議など直接的な人的交流場面ばかりか、物的交流においても爆発的に増加している。

我々の文化・社会・経済活動が「海の向こう」との対話の上に成り立っていることを考えると、ことばの教育はその「基礎の一」と言えるだろう。今号の特集は「語学教育を考える」である。

コミュニケーションの目的は多様化した。その手段・方法も多様化した。しかし、近年の言語教育の変容は、こうした現実社会の変化のためだけでなく、近接する学問領域における知見を取り入れたためでもある。

行動科学全盛期には、言語材料をより効率的に提示する方法の開発に力を傾けた。教授項目を細分化し、パターンを繰り返し、徐々に拡張する方法が編み出された。このときに体系化された数々の教授技法は、今日でも多くの語学教師に用いられている。そして、コミュニケーション能力をめぐる研究から、コミュニカティブ・アプローチが生まれ、これまでの文法や文構造中心のシラバスとはまったく観点の異なる機能・概念シラバスが提案された。教室で行うことは実際のコミュニケーション活動に努めて近づけられ、「意味のあるやりとり」が重視された。授業はインフォメーション・ギャップを埋める「タスク」によって構成される。現在もこの考え方は広く支持されている。その後、研究の関心は教授法から学習者へシフトし、記憶方略や認知スタイルなど認知科学、脳科学の成果が取り込まれた。また、個々の学習者が教材を選ぶという発想でリソース型教材が生まれ、自律学習へと発展していった。現在は、状況主義的学習理論、ヴィゴツキーの発達観の再評価などから、言語学習における社会的文脈がより一層重視さ

れ、教室内においても他者との協同が意識されるようになった。

こうした学習理論の展開と同時に、言語そのものの研究も大きく発展している。日本語学・中国語学もそれぞれに進展し、対照研究もぶ厚くなってきた。また、情報技術の進歩も語学教育／学習のありようを一変させている。こうした言語教育の潮流の中で、中国の語学教育はどのように移り変わり、どのような現状にあるのか。

今号の特集は、日本語教育／学習と中国語教育／学習の二本立てとなっている。現代中国の日本語教育は、日中国交正常化によって本格化し、現在もなお学習者が増え続けている。座談では「中国における日本語教育の移り変わり」をテーマに、往事を振り返り今日的課題を語りあった。論説は、大学における日本語教育の現状を主に置いている。日本語専攻の日本語科目と、日本語専攻ではない学生の外国語科目としての日本語と、それぞれの現状と個別の問題点を明らかにした。また、工藤氏の台湾のビジネス場面におけるコミュニケーション研究も興味深い。ＪＥＴＲＯビジネス日本語能力テストが大連でも実施されるようになり、さらなる需要が見込まれるビジネス日本語教育の有用な資料となるだろう。

もう一方の特集である中国語は、一九世紀から今世紀までの中国語学習、中国語教育に関する論説を集めた。理論的模索、教材分析、インターネットの活用などの幅広いテーマから、読者諸氏の中国語学習に何らかの貢献があるのではないかと期待している。

現在、中国ではその目覚しい発展から国際交流が増大し、中国語学習者数も飛躍的に増加している。二〇〇六年に中国を訪れた外国人は約三千万人、海外百カ国二千三百余校の大学で中国語が教えられており、世界で中国語を学ぶ人口は三千万人に達したと言われている。中国政府もこれに応え、対外漢語（中国語）教育に力を注いでいる。二〇〇四年、中国語の普及拡大のための国家プロジェクト「漢語橋工程」がスタートした。政府間の合意に基づき、各国に中国語教師ボランティアを派遣する「国際中国語教師ボランティア計画」や、中国語学校「孔子学院」の設立が始まり、二〇〇五年には日本にも四校の孔子学院が開設された。政策の重点は、従来の「請進来」（海外から留学生を招き入れる）の拡大と同時に「走出去」（海外へ出て教える）の本格化である。

互いの存在が大きくなっている日本と中国だが、どちらもグローバリゼーション＝英語教育の波に呑まれている。今後の展開に興味は尽きない。

（劉柏林・梅田康子）